

熊本県博物館ネットワークセンターだより

熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター

2025 年 10 月 14 日

No. 62



©2010 熊本県くまモン

イベント情報（令和 7 年 11 月～令和 8 年 2 月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第 2 回企画展「ちょっと昔のくらし探検」

昭和 30 年代からの高度経済成長期には、道具の機械化や家電製品の普及により、生活が大きく変わりました。

今回の企画展では、機械化以前の道具等を通して、昔と今の暮らしの様子の変化を紹介します。

○開催期間 令和 8 年 1 月 6 日（火）～3 月 15 日（日）



古い民家のカマド（大津町）1987 年 白石 巖 氏 撮影

くまもとキッズミュージアム in 御船

○開催日時 令和 8 年 2 月 7 日（土）午前 10 時～午後 4 時 15 分頃

○開催場所 御船町カルチャーセンター

県内の博物館や資料館が集まって、子どもたちが自然や伝統文化を学べる体験学習を行います。竹とんぼ作り、多色版画、缶バッジ作り、古代組紐作り、石磨きなど、さまざまなプログラムを予定しています。詳細は、案内チラシまたは、熊本県博物館ネットワークセンターホームページなどでお知らせします。



多色版画



石磨き

フィールドミュージアムへ飛びだそう！

プログラム名	開催場所	日時	定員	内容	受付期間
洞窟の生き物を観察しよう	錦町 山の中の海軍の町 ひみつ基地ミュージアム	令和 8 年 1 月 25 日（日） 10:00～12:00	20 名	コウモリなど地下壕の中の生き物を観察します。	12 月 25 日 ～1 月 8 日

対象：幼児～一般 ※小学校 3 年生以下は保護者同伴

申込み方法：熊本県・市町村共同システム「熊本県電子申請システム（LoGo フォーム）」または、往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望プログラム名をご記入の上、申し込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。右側の二次元バーコードからも申し込みができます。

（往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。）

記載されている行事は、感染症や災害等の影響により日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。



申込フォーム

No. 319
民俗

ばね秤

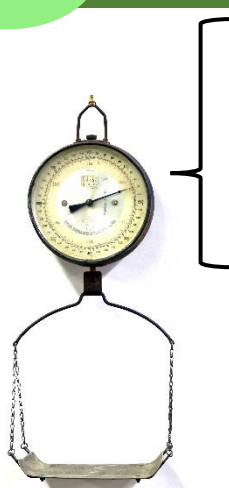


図1 吊り下げ式ばね秤



図2 目盛り拡大

図1は熊本市新町にあった魚屋で、昭和中ごろまで使われていた吊り下げ式のばね秤です。京都の石田衡器製作所（現 株式会社イシダ）製です。ばね秤とは、物の重さに比例してばねが伸びたり縮んだりする性質を利用したものです。目盛りをみると（図2）、この秤は3kg、800^{もんめ}gまではかることができます。

「匁」は、かつて使われていた重さの単位です。一文銭の目方（文目）をからきています。一文銭は江戸時代の最小単位の貨幣で、寛永通宝一文銭が有名ですが、その重さは唐の開元通宝を基に約 3.75g でつくられ、重さの基準として広まっていました。そして、明治 24 年（1891）に制定された度量衡法で、1 匁は 3.75g と正式に定められました。

しかし、日本の工業化が進み、海外に工業製品を輸出する機会が増えたことなどにより、国際的に使用されている単位に一本化する方が良く考えられるようになりました。そこで、大正 10 年（1921）にメートル法に一本化する改正法が公布されますが、生活に密着していた単位をなくすことは難しかったようで、昭和 34 年（1959）に完全にメートル法へ移行するまで、両方の単位に対応できる秤が使われ続けていました。

（迫田久美子）

No. 320
動物

ニホンヒキガエル *Bufo japonicus*（ヒキガエル科）

ニホンヒキガエル（図1）は、本州西部、四国、九州、屋久島に生息しているカエルで、成体の体長は10cmを超える大型種です。熊本県内においても平地から山地まで広く生息していますが、主に森林内で暮らしているためか、見かける機会はそれほど多くありません。

本種は日本に生息するカエルの中でも特に多産多死型の繁殖戦略が顕著な種で、1匹の雌が一度に6000～14000個もの卵を産みます。県内における繁殖期は2～6月頃で、産卵は主に川の淀みや湿地、水たまりなどで行われますが、特徴的な細長いひも状の卵嚢と中にぎっしり詰まった卵は一度見たら忘れられず（図2）、特に他のヒキガエル類が生息していない九州においては、他種と間違えることはほぼありません。

卵嚢の中の卵は、直径2～3mmと成体の体格に見合わない小ささで、また、幼生（オタマジャクシ）の期間を経て変態・上陸した直後の幼体でも、人間の小指の爪ほどの大きさしかありません。それらが数年経って立派な成体となり、繁殖に参加する頃にはわずかに数個体にまで減ってしまう事を考えると、自然の厳しさを痛感するとともに、つい応援したくなる衝動に駆られてしまいます。（中園洋行）



図1 ニホンヒキガエル標本（天草市産）



図2 ニホンヒキガエル卵嚢（八代郡氷川町）

No. 321
植物

オオブタクサ *Ambrosia trifida* (キク科)

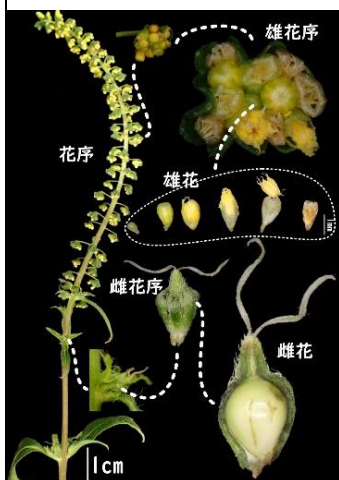


図1 オオブタクサの花

キク科のオオブタクサは、時には高さ3mにもなる大型の一年生草本です。風媒花であるオオブタクサの花（正確には花が集まった花序、図1）は、多数の小さな頭状花序からなり、緑色です。風媒花で、花粉を多量に大気中に放つため、花粉症の原因植物の一つとなっています。オオブタクサは、2種類の頭状花序をつけます。穂の先端まで多数つくのは雄花序で、複数の雄花からなります。穂の根本に数個つく雌花序には、総苞でピッタリと包まれた雌花が一つあります。

現在では熊本県内の至る所に生育するオオブタクサですが、北アメリカ原産の外来生物です。日本では1952年に静岡県と千葉県において初めて確認され、その後急速に広がっていったと言われています。写真の標本（図2）は、当センターの収蔵標本の中では最も



図2 オオブタクサの標本

古い1955年に熊本市の坪井川沿いで採集されたものです。採集者は、在野の植物研究者で熊本記念植物採集会の会長も務めた山城學氏で、標本ラベルには「帰化植物で熊本では初めて見たもの」と書き込まれています。日本での初確認から少なくとも3年後には熊本県に入ってきていたことがわかります。また、1969年発行の「熊本県植物誌」ではクワモドキ（オオブタクサの別名）の欄に「^{ややまれ}稍稀」と示されており、現在ほど普通に見られるものではなかったようです。（前田哲弥）

No. 322
歴史

じしゃしばいかいちょうみせものいちかん
「寺社芝居開帳見世物壺巻」（宇城市本田家資料）

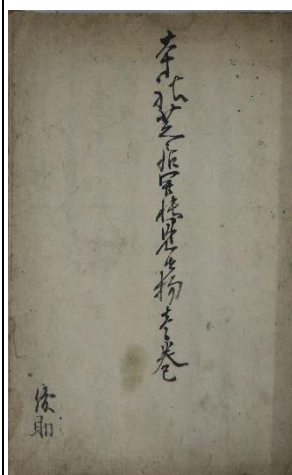


図1 寺社芝居開帳
見世物壺巻 表紙

熊本藩内の寺社で行われた芝居・ご開帳・見世物に関する諸達しについてまとめられた全13丁からなる本資料（図1）は、河江手永会所の旧記類を写した河官旧記録の中に一緒にとじられていました。そして、表紙にある俊助という人物は本田俊助のことで、天保3年（1832）から幕末にかけて手永会所役人や村庄屋役を務めていることからいずれかの業務の中で本資料を写したと考えられます。

本資料に書かれているお達しからは、安永9年（1780）の魚鳥・作り物以外の禁止、文化13年（1816）の水からくり・餅売り人形・猿の踊り・物真似・落とし噺・遠出の切踊りのみを許可（図2）、天保15年（1844）の樽廻し足芸・こま打ち・鞠使い・籠抜き・居合抜き追加許可（図3）など寺社で行われた見世物の変遷を見ることができま

す。宇城市小田家資料の河江旧記抜書（河江手永会所旧記類の抜書）第40巻には原資料からの写しを見ることができ、これには「右表題二弘化二年巳三月寺社芝居開帳見世物一卷二有之一冊を写」との説明とお達し6カ条が写され、もともと原本の表紙に作成年代と考えられる弘化2年巳3月の記載があったことがわかり、本資料には作成年代の表記がありませんが、本田俊助が原資料から写したものかもしれません。（堤将太）

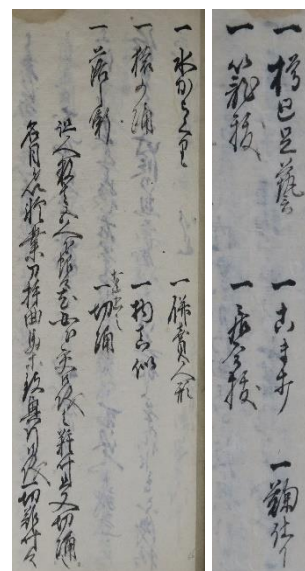


図2（左）

文化13年許可演目

図3（右）

天保15年追加許可演目

No. 323
地学

チョウチンガイの仲間 *Terebratalia* sp.

チョウチンガイと聞いて、どんな生き物を想像しますか？名前からは、提灯に似た形の貝と思われるかもしれませんが。

図1の写真からは、2枚の殻を持つ二枚貝の化石だと思われるかもしれませんが、ところが、これは貝の仲間ではなく、腕足動物わんそくどうぶつという全く異なる生き物なのです。

腕足動物の仲間には、シャミセンガイやホオズキガイがいます。これらは、エサである有機質をとるための触手しよくしゆを持ち、触手と体は2枚の殻からに守られています。腕足動物は、2枚の殻の接合せつごうの仕組みによって、ちょうつがいを持たずに筋肉で接合するグループ（シャミセンガイ等）と、ちょうつがいによって接合するグループ（ホオズキガイ等）に分けられています。チョウチンガイはホオズキガイと同じグループです。

ホオズキガイ類の体の仕組みを詳しく見てみましょう（図2）。殻の中は膜で分かれ、前方である膜の外側には触手が、後方である膜の内側には内臓と殻を開閉するための筋肉があります。また、体を固定するための茎が後端部から出ています。図1の化石を見てみると、殻の中の様子はわかりませんが、図1の左上（背側）と右下（後）の写真で茎が出ていた穴の存在が確認でき、腕足動物の化石であることがわかります。

このチョウチンガイの化石は、天草市（旧本渡市）杵宇土町に分布する新生代古第三紀始新世中期（約4000万年前）の浅い海で堆積した地層から産出しました。腕足動物は、古生代カンブリア紀の初めに出現しましたが、古生代の終わりに約半数の種類が絶滅し、中生代以降は衰退していきました。これまで1万種以上の化石が見つっていますが、現在見られるのは330種程度です。（廣田志乃）



図1 チョウチンガイの仲間の化石

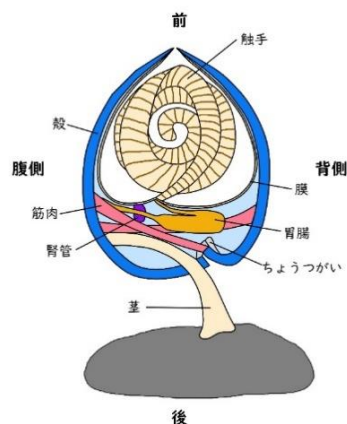


図2 ホオズキガイ類の体のしくみ

熊本県博物館ネットワークセンター

ISIL JP-2004104

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋駅より宮原経由

八代産交行き

「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約3km

活動報告やイベント開催情報満載

↓公式SNSをチェック↓



<X>



<Facebook>



<Instagram>

